



シモマッチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 前岩手県立花巻北高等学校校長

第5回 発問に内在する、教師の ヘリコプター／カーリング的教育観

□「キムT」の思い出

キムTという愛称で慕われていた木村利光先生。彼は岩手の中学校長を退職後、闘病を続けていましたが、この4月に他界されました。私は彼のことを「思いを具現化する魂の言葉をつづるアーティスト」と呼んでいました。岩手の教育界は本当に大きな宝を失いました。そのキムTと昨年12月にコラボ講演をする機会がありました。その席で彼はこんな話をされました。

私は、生徒の前で自己紹介する際、最初に「私は何歳だと思っ？」と問いかける。生徒たちは「50歳」「55歳」「65歳」などと口々にこたえる。私はそんな生徒たちに対して「ピンポーン！全員正解！」と言う。なぜ全員正解なのか。それは、最初の問いかけが「自分は何歳か？」ではなく「何歳と『思うか』』という、いわば答えのない問いだからだ。

つまり、問いに対し、自分が一生懸命その根拠を考えながら出した答えならば、それはすでに正解なのだ、というわけです。

ね。大切なことは正解を知っているかどうかではなく、想像力を働かせること。たとえそれが「正解」とは異なっていたとしても、間違いを恐れず、思ったことを発信することこそ価値がある。そして間違えても自分で考え出したという経験を経て真実に到達することの方が、より深い理解につながっていく——私はキムTの話をこのように受け取りました。

□「問」の「答え」とは？

そもそも「対話」における「問い」は、相手の気持ちや思いを知りたいからこそ発せられるもの。だから、そこには「正解」が存在しているわけではありません。しかし、今、教師や親が子どもに行う「問いかけ」は、往々にして、既に教師や親が持っている「正解」に無理やり導こうとするものだったり、あるいは、自分が有している「正解」を子どもがその通りこたえられないか「ためす」ものになっているのではないかと、私はそんなふうに感じています。

ある講演会で、ヘリコプター&カーリン



グペARENTの話をしたことがありました。ヘリコプターペARENTとは、子どもの上空で常に目を光らせ、子どもが嫌な思いをしたときに舞い降りてくる親、カーリングペARENTとは、子どもの行く先々の障害を先回りして取り除き、子どもを誘導する親のことです。

するとある人から、ヘリコプターティー

チャー、カーリングティーチャーというのはもあるのではないかと言われ、なるほどとうなずきました。それは、子どもの学力はすべて自分の指導によるものと勘違いし、過剰に語り、すべて自分の掌で生徒をコントロールし、子どもの考え方を、教師の思う方向に導こうとする教師です。絵を描いてみました。

ヘリコプター&カーリング／ペARENT & ティーチャーとは、子どもをより良い方向に導きたいという強い思い（＝愛）が根本にあると考えて、どちらもかわいく描いてみましたよ（笑）。

つまり、子どものために先回りして手を打つこと、コントロールしようとすることは、子どもを傷つけない、失敗させたくない、もっと「できる子」にしたいという「愛」があるからこそなのでしょう。でも裏を返せば、それは「傷つくあなたは許せない」「できないあなたはもっと許せない」「だからあなたは〜すべき」というメッセージとして受け取られます。また、「子どもを何とかしたい」という一見正当な思い

の背後には、実は子どもの能力を信じていないことや、他者との相対の中で子どもを見てしまうという、親や教師のメンタリティが見え隠れします。そのような中で、「目に見える」発展と引き換えに、子どもの主体性や幸福感が奪われてしまっているのではないかと思うのです。

ウルグアイのムヒカ前大統領は、人間は発展するために生まれてきたのではない。そして発展は幸福を阻害するものであってはいけない、と言っています。人は本来、「他よりできるようになる」ために生まれてきているわけではないという彼の提言は傾聴に値します。

私はこれまで様々な場で教師の発問について発信してきました。なぜかというところ、その発問、問いかけの中に、教師のヘリコプター／カーリング的教育観や、学校教育の構造的な問題が垣間見えるからです。だとするならば、逆に考えて、この「対話」「問いかけ」を見直すことが、学校教育の根本を変革するためのはじめの一步になりうるのではないかとも思っています。